

【概要】

5. 昆虫類

この仲間は莫大な種数をかかえ、県内では既知種数さえ把握できていない群が多い。他の群に比べて同好者が多く、県内の動物相・生息状況が比較的よくわかっているのはチョウとトンボの2群くらいであったが、前回のレッドリスト選定後、直翅目（佐藤ら 2007・林ら 2010）や水生甲虫類（林・門脇 2008, 2010, 2011, キジラミ類（林2011）, アリ類（佐藤ら 2010）, 鳥取砂丘の昆虫（佐藤・鶴崎 2010）などでまとまったリストが公表されて、チョウやトンボ以外の分類群についても部分的にはあるが、以前とくらべ知見が飛躍的に増大した。

今回の選定種は全体では137種（前回は109種）、このうち絶滅が7種（前回5種）、絶滅危惧Ⅰ類16種（前回は16種）、絶滅危惧Ⅱ類29種（前回は25種）、準絶滅危惧44種（前回は44種）、情報不足34種（前回は6種）、その他の重要種7種（前回は13種）で、39種が今回初めて掲載される種である。前回の掲載種のうち次の種は、今回選定種からはずされた：ムカシトンボ、オオルリボシヤンマ、マルタンヤンマ、キイロサナエ、コサナエ、アオサナエ、トゲヒシバツタ、アカスジオオカスミカメムシ、エゾゼミ、エゾハルゼミ、アカシジミ。これらは、現在は安定して生息すると判断されたか、「その他の保護上重要な種」のランクの定義の厳密化にともなうものである。

チョウは県内に120種（迷チョウを入れると127種）が記録されている（山陰むしの会編 1994にその後鳥取県内から新たに生息地が確認されたクロミドリシジミを追加）。チョウは人目につく昆虫で愛好家も多く、他の動物群にくらべて生息情報が集まりやすい。また移動力があるため環境変化に即応して短期間での分布域の拡大、縮小、シフトがあらわれやすいという特徴をもち、生物相の時間的変化をモニタリングするのに適した動物である。チョウ相に関して過去20年ほどの間でめだった傾向は、南方系の種の北進で、ナガサキアゲハ、イシガケチョウ、クロコノマチョウ、ツマグロヒョウモンなど、過去にはごく稀種、または迷蝶としてしか記録されなかったようなチョウがしだいに個体数を増し、ナガサキアゲハやツマグロヒョウモンなどは、現在では最普通種の中に数えられる。

一方で生息域や個体数が減少傾向（情報不足だがそのおそれがあるものを含む）の種が多数みられる。今回は39種（前回は39種）がそのような種として挙げられた。内

訳は「絶滅」が3（ヒョウモンモドキ、オオウラギンヒョウモン、シータテハ）（前回は4）、「絶滅危惧Ⅰ類」9（ホシチャバネセセリ、ウラナミアカシジミ、クロシジミ、シルビアシジミ、ウスイロヒョウモンモドキ、ウラギンスジヒョウモン、メスグロヒョウモン、ヒメヒカゲ、ウラナミジャノメ（前回は5種）、「絶滅危惧Ⅱ類」7（前回10）、「準絶滅危惧」18（前回11）、「その他の保護上重要な種」1（オナガシジミ）である。生息地や個体数の減少の目立つのは、中国山地に広く存在した山地のススキ草原や湿性草原、あるいは里山の明るい雑木林を生息地とする種で、とくに山地草原性の種は現在はすでに絶滅したもの（オオウラギンヒョウモン、ヒョウモンモドキ）、あるいは危険度の高いもの（ウスイロヒョウモンモドキ、ウラギンスジヒョウモンなど）など、のきなみ危険な状況である。これらは、個々の種の記事のなかでも触れられているが、戦後の農林業形態の変化、たとえば耕作用の牛馬が飼育されなくなって餌を供給してきた採草地が消失したことが減少の最大の要因とみられる。

同様に、里山のコナラやクヌギなどの雑木林がスギやヒノキの林に転換されたり、薪炭林としての利用がなくなったことで人手が入らなくなったりで、面積が減少したり、若木が更新されなくなったりしたことがおそらく原因で、減少しているとみられる種も多い。低山地の雑木林を生息地とするアカシジミ、ミドリシジミの類の多くや、雑木林の林縁の草地にすむヒョウモンチョウ類などがそれである。

これらは産業形態の時代による変遷にねづくもので、根本的な解決が困難である。しかし、きわめて危機的状況にある山地草原性のチョウであるウスイロヒョウモンモドキなどは、現在残っている生息地に人為的な草刈りなどを実施することで個体群の維持をはかることは可能である。幸い、ウスイロヒョウモンモドキは前回のリスト作成にともなって鳥取県の特定希少野生動植物の指定を受け、その後、鳥取市佐治町波多の台では県からの補助金を利用して地元有志が刈り払いを行ないススキ草原の維持を図っている。

なお、前回、「絶滅」として扱われたウラナミジャノメはごく最近、岩美町内から生息地が見つかった。その生息確認報告（竹井 2011）によれば、再導入されたような個

体群ではなく、これまで目にとまっていなかったもとの残存集団と考えられるので、「絶滅危惧I類」へのランク変更を行った。

トンボは県内に88種が記録されている（杉村ら2005）。鳥取・島根両県では1990年代から2002年頃まで、数名の方を中心にかなり精力的な生息調査がなされ、生息記録が充実したが、その後、調査が下火になっており、今回の選定では十分な現況把握ができなかった。この類では今回は24種（前回26種）がレッドリスト掲載種として選定された。内訳は絶滅種2（コバネアオイトトンボとナニワトンボ、前回0種）、絶滅危惧I類1（マイコアカネ、前は3種）、絶滅危惧II類8種（前回5）、準絶滅危惧8種（前回14）、その他の保護上重要な種2（アサヒナカワトンボ、ニホンカワトンボ、前は4種）である。

トンボ目の生息地は、湖沼・湿地や河川・溪流が大部分であり、生息地として局所的な場合が多いが、幼虫時代が水中であることを反映して、生息地の改変や水の汚濁や農薬等の影響による生息環境の悪化が希少化の主要因となっている。今回、県内では絶滅と判断したコバネアオイトトンボやナニワトンボ、また絶滅危惧II類のマイコアカネの生息地は平地の小規模のため池であるが、自然な止水域を巡る環境変化（周囲の里山の環境の変化も含めた）が反映されているとみられる。これらトンボ類の保全には、水質の改善とともに、水辺の移行帯（エコトーン）の植生の保全あるいは再生が重要である。

直翅目は県内に111種が記録されている（佐藤ら2007, 川上2010）。今回のレッドリストには、9種（前回8種）が選定された。カヤコオロギやショウリョウバッタモドキなどの減少は、草原性チョウ類と同様の理由であり、産業形態の時代による変遷のためイネ科草原が消失したことが大きな要因である。ダイリフキバッタはきわめて局地的な分布を示す種であり、本県が種分布の西限である。現在、県内では人為的に管理されているキャンプ場およびスキー場の2カ所しか生息が確認されておらず、危険な状態である。そのほか、ハマスズとヤマトマダラバッタは砂丘地、絶滅したカワラバッタは石ころの河原を生息場所としており、直翅目の選定種の保全には人為的な管理が必要な状況にある。

鞘翅目（コウチュウ目）でも、選定種には、海浜（ハラビロハンミョウ、カワラハンミョウ）、ため池（コガタノゲンゴロウ、ゲンゴロウ）、湿地（スゲハムシ）、山地の草原（フサヒゲルリカミキリ、ホソハンミョウ）など、人為となんらかの関わりがある環境を生活場所とする種が多い。とくにゲンゴロウ類とハンミョウ類で危険度の高い種

がめだっている。

（川上 靖・鶴崎展巨）

■引用文献

- 林 成多・門脇久志（2008）日野川上流域に生息する水生甲虫類. ホシザキグリーン財団研究報告, 11: 291-302.
- 林 成多・門脇久志（2011）日野川流域における水生甲虫類の分布. ホシザキグリーン財団研究報告, 14: 97-132.
- 林 成多・川上 靖・門脇久志（2010）鳥取県大山における直翅目の採集記録. ホシザキグリーン財団研究報告, 13: 111-118.
- 林 成多・藤原淳一・松田隆嗣・門脇久志（2010）鳥取県大山における甲虫類の採集記録. ホシザキグリーン財団研究報告, 13: 189-214.
- 川上 靖（2010）鳥取県におけるシブイロカヤキリ（キリギリス科）の分布. 山陰自然史研究, 5: 74-75.
- 佐藤隆士・鶴崎展巨（2010）鳥取砂丘の昆虫相（予報）. 鳥取県立博物館研究報告, 47: 45-81.
- 佐藤隆士・鶴崎展巨・濱口京子・木野村恭一（2010）鳥取県のアリ類. 鳥取県立博物館研究報告, 47: 27-44.
- 佐藤隆士・田村昭夫・長谷川寿一・國本洗紀・川上 靖（2007）鳥取県の直翅系昆虫. 鳥取県立博物館研究報告, 44: 9-36.
- 杉村光俊・小坂一章・吉田一夫・大浜祥治（2008）中国・四国のトンボ図鑑. いかだ社（東京）, 255 pp.
- 竹井 一（2011）鳥取県のウラナミジャンメを巡って. 月刊むし, 484: 2-8.

アオハダトンボ トンボ目カワトンボ科

Calopteryx japonica Selys, 1869

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)

環境省：—



雄 西伯郡南部町 2009.5.25/撮影：桐原佳介

■**選定理由**：鳥取県では生息地が局所的で、成虫の移動が少ないため河川環境の変化の影響を受けやすい。

■**特徴**：河川中流域の本流をはずれた、ツルヨシが繁茂するような水質のよい緩やかな小さい流れに生息する。ハグロトンボと間違えやすいが、雄は青藍色の金属光沢をもち、雌は翅の偽縁紋が白い。また、ハグロトンボより早く6-7月に成虫が出現する。羽化した場所からあまり離れない。

■**分布** 県内：県内河川で、中流域に局所的。県外：本州，九州。

■**保護上の留意点**：河川管理上は重要でない小さな側流に生息し、きれいな水の流下が必要であることから、河川工事のなどで環境の変化がおきないように配慮する必要がある。

■**文献**：14, 34, 84.

執筆者：國本洗紀

アサヒナカワトンボ トンボ目カワトンボ科

Mnais pruinosa Selys, 1853

鳥取県：その他の重要種(OT)

環境省：—



ヒウラ群の雄 鳥取市鹿野町鬼入道 2001.6.8/撮影：門脇久志

■**選定理由**：翅色型が異なる2つの地理型の分布境界が存在し、両型は種分化や生態、分布形成過程を解明するうえで重要な地域個体群である。

■**特徴**：DNA解析の結果から2種説が提唱され、ニシカワトンボ（前回はこの名称で掲載）はアサヒナカワトンボとされた。体長50 mm前後。成虫は5-6月に溪流で見られ、下流部のニホンカワトンボとすみ分ける。県内には橙色翅型雄+透明翅型雄+透明翅型雌の「南海群」と透明翅型雄+透明翅型雌の「ヒウラ群」の2型がみられ、県東部で分布域を交替させ、両者の移行帯では溪流別あるいは上下流のすみ分けや中間的な個体が観察され、今後の推移が注目される。

■**分布** 県内：県内全域。鳥取市鹿野町付近から東に「ヒウラ群」、西に「南海群」が生息。県外：本州（関東平原地部，新潟以西），四国，九州。

■**保護上の留意点**：移行帯である鳥取市（鹿野町・佐治町栃原），三朝町中津付近の集団が重要である。

■**文献**：10, 47, 185, 187.

執筆者：門脇久志

ニホンカワトンボ トンボ目カワトンボ科

Mnais costalis Selys, 1869

鳥取県：その他の重要種(OT)

環境省：—



橙色翅雄と透明翅雌の交尾 鳥取市鹿野町鬼入道 1995.5.20/撮影：門脇久志

■**選定理由**：翅色型が異なる2つの地理型の移行帯が存在し、両型は生態や分布形成の過程を解明するうえで重要な地域個体群である。

■**特徴**：DNAによる系統解析でオオカワトンボ（前回はこの名称で掲載）はニホンカワトンボと名称変更された。体長55-60 mm。成虫は5-6月に中流域に見られ、上流部のアサヒナカワトンボとすみ分ける。県内には橙色翅型雄+淡橙色翅型雄+透明翅型雄+淡橙色翅型雌+透明翅型雌の「中国群」と橙色翅型雄+淡橙色翅型雌+透明翅型雌の「中部群」の2型が見られる。両群の移行帯では西から東へ透明翅型雄が次第に減り、淡橙色型雌が増える。また、中国群にはアサヒナカワトンボの「南海群」、中部群には「ヒウラ群」が対応している。

■**分布** 県内：県内全域。千代川以東に「中部群」、天神川以西に「中国群」が分布し、中間が移行帯。県外：北海道，本州，四国，九州，隠岐。

■**保護上の留意点**：移行帯の鳥取市（鹿野町・青谷町）付近の集団が重要。

■**文献**：10, 47, 185, 187.

執筆者：門脇久志

コバネアオイトトンボ トンボ目アオイトトンボ科
Lestes japonicus Selys, 1883

鳥取県：絶滅 (EX)

環境省：絶滅危惧I類 (CR+EN)



鳥根県松江市大垣町 1991.10.26 / 撮影：大浜祥治

- 選定理由**：全国的に丘陵地の沼やため池などの止水域に生息するが、局地的な分布を示し、鳥取県では記録のあった生息地にもみられなくなった。
- 特徴**：背面は金属光沢のある暗緑色、腹面は黄色のイトトンボである。成虫は7月頃羽化し周囲の林地内に移動するが、成熟すると水域に戻ってくる。挺水植物の柔らかい組織に産卵するため植物の多い池等にすむ。
- 分布** 県内：鳥取市、倉吉市のため池。 県外：本州、四国、九州。
- 保護上の留意点**：県内の生息地であったため池は、コイの放流でヒツジグサ等の水草がなくなり、環境変化で絶滅したものと思われる。近くに生息地がなく、飛来が望めない種なのでため池の管理に配慮が必要である。
- 文献**：58, 85.

執筆：國本洗紀

オツネイトンボ トンボ目アオイトトンボ科
Sympecma paedisca (Brauer, 1877)

鳥取県：情報不足 (DD)

環境省：—



連結産卵 鳥根県大田市五十猛町 / 撮影：竹本耕一

- 選定理由**：県内の分布が局限される。50年以上前の日野郡での記録が唯一。
- 特徴**：体長35–40 mm内外。体色は雄雌とも淡褐色で成熟しても変化しないが、複眼は成熟雄では青味が強くなる。未成熟のホソミオツネイトンボと本種は、同じ褐色の体色で非常に似るが、翅を閉じた時に前翅と後翅の縁紋が重ならないのが本種、重なるのがホソミオツネイトンボである。初夏に羽化した未熟な個体は成熟することなく越冬し、春になると成熟した雄が水辺に現れる。本種と近縁のホソミオツネイトンボが、溜池から湿地・水田まで非常に広範な環境に適応し、低山地から平野部まで普遍的に分布するのに対し、本種の山陰地方における分布は非常に限られる。
- 分布** 県内：近隣の府県状況から分布は確実と思われるが記録としては日野郡の1例のみ。 県外：北海道、本州、四国、九州北部。暖地では生息地が限られる。
- 保護上の留意点**：生息地となる開放的で植生豊かな自然度の高い池沼の保全。
- 文献**：40.

執筆：大浜祥治

モートンイトンボ トンボ目イトトンボ科
Mortonagrion selenion (Ris, 1916)

鳥取県：情報不足 (DD)

環境省：準絶滅危惧 (NT)



交尾 鳥根県松江市西忌部町 2006.6.27 / 撮影：祖田 周

- 選定理由**：県内の分布が局限される。50年以上前の鳥取市での記録が唯一。
- 特徴**：体長23–30 mm内外。鳥取県に生息するイトトンボ科の中では体長が最も小さい。成熟した雄では、胸部の黄緑色と腹部後半のオレンジ色が鮮やかなコントラストを示す。未熟メスは全身オレンジ色だが成熟すると鮮緑色に変わる。明るい湿地をおもな生息環境とする。減反政策による水田の休耕田化に伴い、一時的に本種の好む生息環境が創出され、大量発生することもあるが、植生遷移により草丈が伸び乾燥化が進むと再び姿を消してしまう。生殖活動は早朝に行なわれ、雌は単独で水際の植物組織内へ産卵する。
- 分布** 県内：近隣の府県状況から分布は確実と思われるが、記録としては鳥取市付近の2カ所だけが知られている。 県外：北海道南端、本州、四国、九州。近年、全国的に生息地の減少が著しい。
- 保護上の留意点**：生息環境である湿地や水田環境の維持。
- 文献**：63, 110.

執筆：大浜祥治

アオモンイトトンボ トンボ目イトトンボ科

Ischnura senegalensis (Rambur, 1842)

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)

環境省：—



米子市粟島神社トンボ池 2004.9.13 / 撮影：干村隆司

■**選定理由**：河川河口域や海岸に近い湖沼に生息地が限定される。西部では比較的ふつうだが、河川感潮域に乏しい県中部や東部では、生息地が少ない。

■**特徴**：腹長 25 mm 内外。雄は胸部は淡緑色、腹部第 8 節は淡青色。雌は緑色でときに雄と同色。成虫は 6–10 月に出現。水辺の植物組織内に産卵。成虫と幼虫は河川河口域のヨシなどの挺水植物が繁茂した場所に生息する。

■**分布** 県内：県内主要河川の河口域。比較的近年の記録としては、鳥取市浜坂、千代川下流、湖山池、羽合町橋津、長瀬、米子市（日野橋下、湊山公園、彦名）、境港市（麦垣町、米子空港）など。県外：本州・四国・九州；国外では東アジアからアフリカまで。

■**保護上の留意点**：河川・湖沼の感潮域のヨシ原の維持が重要である。

■**文献**：14, 32, 33, 185, 197.

執筆：鶴崎展巨

ムスジイトトンボ トンボ目イトトンボ科

Paracercion sexlineatum (Selys, 1883)

鳥取県：絶滅危惧 II 類 (VU)

環境省：—



雄 米子水鳥公園 2009.9.11 / 撮影：桐原佳介

■**選定理由**：日本海側では稀なトンボである。県内の生息地がきわめて限定されている上、近年減少傾向にある。

■**特徴**：体長 30–37 mm。濃い青色の中型のイトトンボで、同属のセスジイトトンボ *P. hieroglyphicum* に酷似する。平地の開放的な池沼や溝川、汽水の湿地などに生息する。水草の豊かな浅い湿地や緩やかな水路、湿地の周辺の草地や林縁にも多く見られる。米子水鳥公園では 5 月から 10 月まで見られる。湿地の水草に産卵し、幼虫はその根元に潜む。

■**分布** 県内：米子市米子水鳥公園が県内唯一の産地。県外：宮城県以南の本州、四国、九州、南西諸島。内陸や日本海側では稀；台湾、中国、ベトナム。

■**保護上の留意点**：生息地の環境の保全が重要。米子水鳥公園は近年個体数の減少が著しい。その原因として、年々進行している地盤沈下に伴い、園内の池の塩分濃度が上昇傾向にあることが疑われる。

■**文献**：118, 151, 152.

執筆：桐原佳介

ムカシヤンマ トンボ目ムカシヤンマ科

Tanypteryx pryeri (Selys, 1889)

鳥取県：情報不足 (DD)

環境省：—



鳥取市栲谿公園 2008.5.16 / 撮影：川上 靖

■**選定理由**：幼虫の生息環境が湧水のしみでる崖や斜面など特殊であるが、ランクを判定できるだけの情報が得られていない。

■**特徴**：腹長 50 mm 前後。複眼が離れていて、黒地に黄色い斑紋が反復される。成虫は、鳥取県では 5–7 月にみられ、止まっていることが多く、飛翔も緩慢である。幼虫は、湧水がしたたり落ち、コケが一面に茂っているような場所に、穴を掘って生活している。幼虫期間は長く、3–4 年と推測されている。

■**分布** 県内：全域。県東部には比較的産地が多い。県外：本州と九州で、四国からは記録がない（日本固有種）。

■**保護上の留意点**：生息環境である湧水のある崖や斜面、湿地などの保護。とりわけ法面の処理については配慮が必要である。

■**文献**：14, 33, 35, 95.

執筆：川上 靖

アオヤンマ トンボ目ヤンマ科
Aeschnophlebia longistigma Selys, 1883

鳥取県：絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

環境省：—



雌 鳥根県安来市佐久保町 2007.7.6 / 撮影：祖田 周

■**選定理由**：県内での生息地が限定され、個体数も少ない。生息する池沼のヨシ原消失や埋め立てにより、産地が急速に減っている。

■**特徴**：体長70–75 mm内外。春から初夏に出現する、全身黄緑が鮮やかな中型のヤンマ。羽化は5月上旬頃から始まり、多産地では成虫が8月中旬頃まで見られる。成熟したオスは、日中、池沼やクリークのヨシ原を、縫うように飛翔する。黄昏時は他のヤンマに交じって高所を摂食飛翔する。交尾はヨシ原の中や、林縁の小枝などで観察され、産卵はメス単独で抽水植物の茎に行く。かつては平野部で普通に見られたが、造成による池の埋立てやねぐらとなる雑木林の伐採等により、生息環境の悪化・消失が著しい。

■**分布** 県内：東部の平野部からのみ記録がある。県外：北海道、本州、四国、九州。広く分布するが生息地は限定される。

■**保護上の留意点**：ヨシやガマなど背丈の高い抽水植物の密生する水域の保全。

■**文献**：31, 33, 115.

執筆：大浜祥治

ネアカヨシヤンマ トンボ目ヤンマ科
Aeschnophlebia anisoptera Selys, 1883

鳥取県：絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

環境省：準絶滅危惧 (NT)



鳥根県平田市美野町 1991.6.25 / 撮影：祖田 周

■**選定理由**：生息地が丘陵地のヨシやガマなどのよく茂った湿地や休耕地に限定される。県内では1981年を最後に採集記録がない。

■**特徴**：体長80 mm、後翅長50 mm程度。腹部第3節はくびれず、ずんどう。幼虫は第8, 9に背棘があるのは本種だけである。成虫は平地や丘陵地のヨシなどの挺水植物の茂った湿地や近くに樹林があるところに多く、6月上旬頃から羽化しはじめ9月いっぱいまで見られる。成熟すると黄昏飛翔が見られる。繁殖行動は朝から日中に行われることが多く、産卵は正午前後に観察され、単独で水田や湿地の土や朽木に潜って産卵する。県内での確実な採集記録は北村(1959)と松原・三島(1959)の2例しかなく、現状は不明である。

■**分布** 県内：過去の確実な記録は鳥取市と米子市河崎の2例のみ。県外：新潟県以南の本州、四国、九州；中国の南京付近。

■**保護上の留意点**：生息地が見つかった場合には、湿地および周辺の樹林の一体的保全が重要。

■**文献**：63, 108.

執筆：祖田 周

ルリボシヤンマ トンボ目ヤンマ科
Aeshna juncea (Linnaeus, 1758)

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)

環境省：—



産卵中の雌 日野郡日南町呼子 2004.10.7 / 撮影：祖田 周

■**選定理由**：寒冷地の湿地や挺水植物のよく茂った池沼に生息するが、個体数は少ない。

■**特徴**：成虫は体長85 mm、後翅長55 mm程度。胸部の前方の黄緑条の上端は後方に流れるように張り出す。雌はすべて黄緑色であるが青みの強い個体もある。幼虫はオオルリボシヤンマに似るが下唇は短く中肢基部の中央までしか届かず、下唇中片の先端部がへこまない。成虫は寒冷地の湿地や池沼を好み、羽化は7月上旬頃から始まる。10月中旬まで見られる。9月頃に入ると雄はオオルリボシヤンマより低く飛び植物の間を縫うように水面から1 m前後で縄張り飛翔をするようになる。雌は単独で植物の茎や湿った土などに産卵する。

■**分布** 県内：東部と西部の山間地。1990年以降の記録は国府町菅野、鳥取市安蔵、大山町香取、大野池、日南町数カ所など。東伯郡や倉吉市周辺での記録はない。県外：北海道、本州、四国(徳島県)；北半球冷温帯に広く分布。

■**保護上の留意点**：山間部の池沼や湿地の保全が重要。

■**文献**：58, 108, 184.

執筆：祖田 周

ホンサナエ トンボ目サナエトンボ科

Gomphus postocularis Selys, 1869

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)

環境省：—



鳥取県安来市古川 2008.5.27/撮影：祖田 周

- 選定理由**：鳥取県では生息地域が限定され、とくに東部には少ない。
- 特徴**：体長の割に胸部とそれに続く腹部、腹端が大きく、太く見える体長約50 mmの中型のサナエトンボである。成虫は4月下旬から6月にみられ、止まっていることが多い。羽化後は生息水域から少し離れた林へ移動する。平地や丘陵地、低山地の腐植の堆積する場所があるような緩い流れや、大きな湖の岸の挺水植物の根元の泥の中。
- 分布** 県内：東部は多鯰ヶ池、中部と西部は流れの緩い本流・支流。県外：北海道、本州、四国、九州、佐渡島。
- 保護上の留意点**：生息水域のコンクリート護岸や流路の直線化などが生息に適した環境を奪うことから、河川や用水路の改修時に多様な環境を残す配慮が必要である。
- 文献**：34, 86, 184.

執筆：國本洗紀

ヒロシマサナエ トンボ目サナエトンボ科

Davidius moiwanus sawanoi Asahina & Inoue, 1973

鳥取県：絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

環境省：準絶滅危惧 (NT)



2005.5.28/撮影：守安 敦

- 選定理由**：生息地は、いずれも谷間の狭い湿地で、乾燥化により個体数の減少が危ぶまれる。鳥取県は本亜種の分布東限。
- 特徴**：体長45 mm前後の小型のサナエトンボで、体色は同属のヒラサナエと酷似する。モイワサナエ *Davidius moiwanus moiwanus* の別亜種で、雄では、尾部附属器の形状が異なっていることで見分けられる。幼虫は、寒冷な明るい湿地や川などの中にある緩やかな細流にたまった細かい砂の中や植物の根際に潜り込んで生活している。岡山県では、羽化は、5月中旬から下旬にかけての午前中に行われ、成虫は7月上旬まで見られる。
- 分布** 県内：鳥取県では、日南町と三朝町に生息している。県外：岡山県、鳥取県、広島県にも分布しており、産地は、5地域に限られている。
- 保護上の留意点**：生湿地や周辺の開発を避けること、集水域の森林伐採により、湿地の乾燥化が進まないようにする事が重要である。
- 文献**：138, 144, 145, 155, 166.

執筆：守安 敦

タベサナエ トンボ目サナエトンボ科

Trigomphus citimus tabei Asahina, 1949

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)

環境省：—



鳥取県松江市東生馬町 1995.4.24/撮影：大浜祥治

- 選定理由**：鳥取県では生息地が限られ、個体数も少なく、近年記録がほとんどない。
- 特徴**：前胸正面に太いL字状の黄色い模様が目立つやや小型のサナエトンボである。低地の緩やかな流れやため池にすみ、成虫は5月初め頃羽化し、夏に産卵する。
- 分布** 県内：国府町、倉吉市、溝口町のため池。県外：静岡、福井県より西の本州、四国、九州。
- 保護上の留意点**：県内の生息地はため池と思われるので、水抜きをしない、植物性沈殿物を除かない、コイやブラックバス等の放流をしない等管理に配慮が必要である。
- 文献**：3, 85, 108.

執筆：國本洗紀

オグマサナエ トンボ目サナエトンボ科
Trigomphus ogumai Asahina, 1949

鳥取県：絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

環境省：絶滅危惧Ⅱ類 (VU)



雄 鳥根県出雲市下古志町宇賀池 2009.4.29/撮影：祖田 周

- 選定理由**：県内の分布が限られるが、とくに西部での記録が少ない。
- 特徴**：体長45–50 mm内外。コサナエ属4種の中では最も大きく、また幼虫も腹部先端が一番長くきわめて特徴的である。おもに平野部の開放的でやや水深のある池沼に生息するが、内陸部では局地的となる。山陰地方では、春、最も早く出現するトンボの一つで、羽化は4月中旬頃から始まり、各生息地において1週間程度で終了する。成熟した雄は水辺の植物や地面に静止し縄張りを形成する。産卵は雌単独で、ホバリングしながら全身を振って岸辺の草地に卵をばらまく。同属のコサナエ、タベサナエと混生する場合もあり、同定には注意が必要である。
- 分布** 県内：県東部からは比較的記録があるが、西部の記録は非常に少ない。県外：本州西部、四国、九州。四国からは最近記録がない。
- 保護上の留意点**：開放的で比較的大きな池沼に生息するが、開発や減反による溜池の埋め立てや、休息場所となる周辺雑木林の伐採などに留意する必要がある。
- 文献**：31, 33, 34, 115, 184.

執筆：大浜祥治

キイロヤマトンボ トンボ目エゾトンボ科
Macromia daimoji Okumura, 1949

鳥取県：絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

環境省：準絶滅危惧 (NT)



未熟雌の採食飛翔 安来市山辺町 2006.5.25/撮影：祖田 周

- 選定理由**：生息地がきわめて限定され、河川改修等による環境の改変により絶滅する可能性がある。
- 特徴**：体長75 mm、後翅長45 mm内外。第2腹節および第3節の黄斑は側面で上下に切れ、第7節背面の黄斑は大きくやじり状。幼虫はクモのような形。成虫は5月中旬頃から羽化し始め8月上旬まで見られる。羽化後の未熟な個体は河川の近くにある林縁部で採食飛翔する。成熟した雄は再び川に戻り水面近くをすばやく飛翔する。雌は単独で河川の中央部で間歇打水産卵することが多い。全国的に分布が局所的で河川中流域の川床が砂地のところを好むが、県内でそのような環境がみられるのは法勝寺川のみであるように思われる。河川改修により川床の砂地がなくなるとすめなくなるおそれがある。
- 分布** 県内：法勝寺川水系の中流域から下流域。県外：福島県以南の本州、九州；朝鮮半島南部。
- 保護上の留意点**：幼虫は川床が砂地の河川を好むが、少しでも砂地があると生息できるので、そのようなところを残すことが重要。
- 文献**：33, 108, 184.

執筆：祖田 周

エゾトンボ トンボ目エゾトンボ科
Somatochlora viridiaenea (Uhler, 1858)

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)

環境省：—



飛翔中の雄 鳥根県飯南町赤名湿原 2004.7.4/撮影：高木 聡

- 選定理由**：県内には生息に適する湿地が少なく、生息地がきわめて少ない。休耕田等で一時的に個体数を増すことがあるが、植生遷移による乾燥化などにより消失する産地が多い。
- 特徴**：体長雄60 mm内外、雌60–70mm内外。全体が金属光沢のある暗緑色をした中型のトンボで夏～秋に出現する。成熟したオスは水田や湿地上で縄張り飛翔を行いメスの飛来を待つ。黄昏時には生息地周辺の高所を広範囲に飛び回る。同属のハネビロエゾトンボに酷似し、雌雄とも腹部に黄斑があるのが本種であるが、成熟した雄では黄斑の消失する個体も見られ、尾部上付属器による確認が必要。
- 分布** 県内：県東部から西部まで見られるが、生息地は限定される。県外：本州・四国・九州。
- 保護上の留意点**：本種の生息に適する湿地が少なく、これらの環境は乾燥化しやすいため、人為的に湿地の保全を図る必要がある。
- 文献**：31, 33, 115.

執筆：大浜祥治

ハネビロエゾトンボ トンボ目エゾトンボ科

Somatochlora clavata Oguma, 1913

鳥取県：絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

環境省：絶滅危惧Ⅱ類 (VU)



雄 岡山県岡山市南区宮浦 2010.8.28/撮影：守安 敦

■**選定理由**：県内における生息地がきわめて限定され、生息地の個体数も少ない。湿地の細流や水田脇の小川など生息環境の多くが、里山の開発や荒廃、用水路のU字溝化等により、本種に適さない環境になっている。

■**特徴**：体長60–70 mm内外。体色は暗緑色で金属光沢があり、がっしりした印象を受ける中型のトンボ。特にオスはエゾトンボに酷似するが、雌では本種の産卵弁が長大で区別は容易。初夏に羽化し、未熟な個体は生息地近くの樹林地に移動し、やや開けた空間の上空をゆったりと飛翔しながら摂食などを行なう。成熟した雄は水域に戻り、比較的狭い範囲をホバリングを交えながら往復飛翔する。産卵は雌単独で、細流の水面や水際に腹端を繰り返し打ちつける。

■**分布** 県内：東部の鳥取市国府町と西部の大山山麓にわずかな記録がある。県外：北海道，本州，四国，九州に分布するが、各地とも産地は局地的である。

■**保護上の留意点**：緩やかな細流のある湿地や里山環境の保全。

■**文献**：3, 33.

執筆者：大浜祥治

ハッチョウトンボ トンボ目トンボ科

Nannophya pygmaea Rambur, 1842

鳥取県：絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

環境省：—



日野郡日野町 雄 2006.6.6/撮影：桐原佳介

■**選定理由**：県内の生息地がきわめて局地的で、個体数が少ない。また、不安定な環境に生息するため、環境の変化により絶滅する恐れが強い。

■**特徴**：体長20 mm。国内に生息するトンボの最小種の一つ。雄は成熟すると全身が真っ赤になり、翅の基部は橙色。雌は茶褐色で、腹部に黄色と黒の斑模様がある。成虫は5月中旬から9月中旬にかけて出現し、日当りがよく草丈の低い湿地に生息する。

■**分布** 県内：岩美郡，東伯郡三朝町，西伯郡南部町（旧西伯町），日野郡などで記録があるが、現在の確実な生息地は岩美町唐川湿原と日野郡日野町のみ。県外：本州，四国，九州に分布するが、産地は局地的である。朝鮮半島，中国から東南アジア，オーストラリアなどの熱帯・亜熱帯地域に生息。

■**保護上の留意点**：適切な環境管理を行い生息地の遷移を止めると同時に、生息地周辺に生息適地を整備し、分散を図ることも重要。

■**文献**：13.

執筆者：桐原佳介

マイコアカネ トンボ目トンボ科

Sympetrum kunckeli (Selys, 1884)

鳥取県：絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

環境省：—



雄 鳥根県松江市大垣町円木地 1997.10.13/撮影：大浜祥治

■**選定理由**：1968年以降、県内の採集記録が途絶えている。絶滅しているおそれもあるが、県内では最近10年ほどトンボ類の調査が不十分なため前回と同じくランクにとどめた。

■**特徴**：腹長20 mm内外。平地の植生の豊かな池沼や湿地に生息する。6–11月に出現する成虫は同属のマユタテアカネに酷似するが、肩から胸にかけて虎状斑があることで区別できる。

■**分布** 県内：採集記録は岩美町鳥越，鳥取市青谷町露谷，米子市（岡成，和田町，彦名町）。県外：北海道，本州，四国，九州；朝鮮半島，中国東北部～北部。

■**保護上の留意点**：ひきつづき生息地の探索が必要である。

■**文献**：43, 119, 170, 185.

執筆者：鶴崎展巨

ヒメアカネ トンボ目トンボ科
Sympetrum parvulum (Bartenev, 1912)

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)

環境省：—



雄 鳥根県隠岐郡西ノ島町耳浦 2008.10.19/撮影：大浜祥治

■**選定理由**：分布が局所的であり個体数も少ないうえに、生息適地が失われつつある。

■**特徴**：日本のアカネの仲間では最も小型である。成熟すると雄は顔面が白く、体は真っ赤になるが、雌は橙黄色のままである。平地や丘陵地の樹木のあまり入らない湿地。ため池の下の湛水休耕田のような部分にも生息を広げる。梅雨時に羽化した成虫は少し離れた林ですごし、成熟して羽化水域にもどる。

■**分布** 県内：県内に広く記録はあるが、確実に見られるところはない。県外：北海道，本州，四国，九州および淡路島，隠岐島などの離島。

■**保護上の留意点**：平地や丘陵地などの湿地の水源地を保全し、湿地を安定させるとともに、水抜きをしない開発を抑制する必要がある。

■**文献**：14, 85.

執筆：國本洗紀

コノシメトンボ トンボ目トンボ科
Sympetrum baccha matutinum Ris, 1911

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)

環境省：—



雄 鳥根県益田市遠田町 2000.9.27/撮影：大浜祥治

■**選定理由**：生息地がきわめて限定され、河川改修等による環境の改変により絶滅する可能性がある。

■**特徴**：腹長25 mm内外。翅端に黒褐色斑をもつアカトンボ。成熟雄の体は鮮やかな赤色。雌には眉斑があるが、雄はふつうそれをもたない。幼虫は低山地の開けた池や水田に生息。成虫もその周囲で見られる。成虫は6-11月に出現。

■**分布** 県内：全域の低山地。比較的近年の記録は鳥取市鹿野町と三朝町のみ。県外：北海道，本州，四国，九州；朝鮮半島，中国東北部。

■**保護上の留意点**：どこでも生息地が限定される傾向がある。鳥取県で生息が確認されている中部の低山地の池や水田周辺の環境の保全管理が重要。

■**文献**：31, 36, 88, 115, 185.

執筆：鶴崎展巨

ナニワトンボ トンボ目トンボ科
Sympetrum gracile Oguma, 1915

鳥取県：絶滅 (EX)

環境省：絶滅危惧II類 (VU)



雄 鳥取市/撮影：祖田 周

■**選定理由**：日本海側では分布が非常に限られ、鳥取市と福井県小浜市の2カ所のみ知られていた。生息地であった鳥取市内の溜池では、1996年以降生息が確認できず、絶滅したものとみられる。

■**特徴**：体長35 mm内外。アカトンボの仲間であるが、雄は成熟しても赤くならず、全身に青灰色の粉をまとう。平地から丘陵地の遠浅の溜池などが典型的な生息環境。未熟成虫は水辺を離れて生活しているが、9月頃から成熟した雄が水辺に帰り始め、岸辺の木陰となった枝先に静止し縄張りをもつ。産卵は連結または単独で、池の干上がった箇所にも卵をばらまく。

■**分布** 県内：1993年に日暮卓志氏が発見した鳥取市大塚の溜池が唯一である。県外：近畿，東海地方，瀬戸内沿岸地域。

■**保護上の留意点**：丘陵地の溜池など、新たな生息地が発見された場合は、その保全が急務である。

■**文献**：31, 33, 34.

執筆：大浜祥治